

万葉集734番歌の「手に巻かれむを」について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Fifth Phrase of the 734th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集734番歌は、通説では「わが思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを」と訓読されている。この歌の結句は、西本願寺本などには「手二所纏牟」とあるが、元暦校本・類聚古集などの古写本に「手二所纏乎」とある。通説では後者の方を正しいものとして「手に巻かれむを」と訓読し、「妹の手に巻かれようものを」と解釈している。しかしこの解釈には疑問がある。なぜならば、この歌の後半部の主語は「玉」であり、単なる物体であるから、「妹の手に巻かれようものを」と「意志」の表現を用いるのは不自然だからである。本論文では、この歌と構造的に類似した343番歌との比較検討から、結句は「手二所纏牟」の方が正しく、「手に巻かれなむ」と訓読し、「手に巻かれるだろう」と解釈すべきことを提案する。

1. はじめに

本論文で取り上げる734番歌は、万葉集巻四に収録された309首の相聞歌のうちの一つで、大伴家持が大伴坂上大嬢から贈られた歌に答えたものである。本論文の目的は、特にこの歌の結句の訓釈について再検討し、その訓みと意味を確定させることである。そのためにまず、歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう^[1]。参考のため、大伴坂上大嬢の729番歌もいっしょに示す。

04/0729 玉ならば 手にも巻かむを うつせみの 世の人なれば 手に巻きがたし

04/0734 わが思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを

【原文】吾念 如此而不有者 玉二毛我 真毛妹之 手二所纏乎

次に、734番歌に関する先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。また、注目箇所には波線を引いた。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

①新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】わが思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを

【現代語訳】私の思いがこんなであるくらいなら、いっそ玉にでもなった方がいい。そうしたらほんとうにあなたの手に巻かれようものを。

【注釈】七二九に答えた歌。大嬢の「玉ならば手にも巻かむを」の語句を踏まえて「手に巻かれむを」と応じた。第三句「もが」は願望の助詞。

②新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】我が思ひ かくしてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを

【現代語訳】わたしも こんなにつらい思いをするくらいなら いっそ玉にでもなりたい そしたらほんとうにあなたの 手に巻かれように

【注釈】かくしてあらずは——カクシテは、このようにつらい状態にあつて、の意。このズハは、～せんよりは、の意のそれ。○玉にもが——ニは断定の助動詞ナリの連用形。このモガは願望。○まことも——副詞的用法のマコトは他人の言を受けてそれに同意する場合が多い。ここも大嬢の「玉ならば手にも巻かむを」(七二九)を受けている。○手に巻かれむを——原文は底本など仙覚本系諸本に「手二所纏乎」とあるが、これは中古の仮名訓「てにもまかれむ」に合わせた二次的本文。元暦校本など非仙覚本には「手二所纏乎」とあり、これが原形であろう。

③講談社文庫(中西進)^[3]

【訓読文】わが思ひ かくてあらずは 玉にもが ^{まこと}真も妹が 手に巻かれむを

【現代語訳】一人寝に苦しんでばかりいないで、玉でありたい。まこと、あなたの手にまかれようものを。

【注釈】わが思ひかくてあらずは——私の思いがこのようにあらずして。前歌をうける。○玉にも——七二九をうける。

④萬葉集註釈(澤瀉久孝)^[4]

【訓読文】吾が思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを

【現代語訳】この自分の思ひ、こんな思ひをしてゐずに、いつそ玉でもあればよい。そしたらほんとうに妹の手に巻かれように。

【注釈】吾が思ひかくてあらずは——かかる思ひをせむよりは、といふのとほゞ同じ意にはなるが、それを「吾が思ひかくて……」としたところに観念的にならずに、実感を示さうとしたものかと思ふ。

まことも妹が手に巻かれむを——「まことも」は前(七二九)の坂上大嬢の作に「玉ならば手にも巻かむを」とある言葉をうけて、おつしやる通り、ほんに、と今も云ふのと同じ意味である。次に結句の文字と訓であるが、元、類(八・二三)、紀に「手二所纏乎」とあつて訓はテニモマカレムとあつたが、古(三・一六オ)にはその「乎」が「牟」とあり、訓は右の古訓と同じであるが、西以後の諸本、版本に至るまで皆「牟」であり、訓はテニマカレナムとした。これは仙覚の改訓と思はれ、それが行はれてゐたが、古義に古写本の文字に注意し、「これに依ば、マカレムヲと訓べし」といひ、新訓をはじめ定本や古典大系本などそれに従はれたが、新考にはなほ「牟」の誤とすべし、とし、マカレナムの旧訓が新校や私注には採られてゐる。これはいづれが正しいか。まづ文字の考察からはじめるが、「牟」より「乎」へ、「乎」より「牟」へ、二つの誤写の例は集中にいくつもある。たとへば「^{アハトキ}相時 ^{イツトシリテカ}何時跡知而加 ^{ワガ}吾 ^{コヒザラム}不恋有牟」(二・一四〇)の「牟」は本書では金沢本によつて改めておいたが、版本では「乎」であるの

みならず、元、紀、細も「乎」である。しかし金のみで無く、類（十二・一三五）、西、陽、京なども「牟」であり、訓は諸本全部ワガコヒザラムであるから、元、紀の如き古本も「乎」であつたとしてもそれは誤である事問題とするに及ばない。さういふ例を見ると、ここも右に述べたやうに「乎」は元、類、紀三本のみであり、元には右に「牟」ともあるのだから「乎」を誤と見てもよいやうに見える。しかし又別の例をとると、

コ、ロナキ アメニ モアルカ ヒトメ モリ トモシキイモニ ケフダニアハムヲ
無心 雨尔毛有鹿 人目守 乏妹尔 今日谷相乎（十二・三一二二）

の結句は元、類（五・八〇）、紀、陽、京、等に「乎」とあるところを版本のみならず、西、細も「牟」とある。（校本に類も「牟」とあるやうな注になつてゐるが、それは明らかに「乎」と認むべき文字である。）しかし訓は元、陽、京、などの古本に既にアハムヲとあり、類にはアフヲとし、これは「乎」が「牟」に誤つた例と認むべきものである。ここには一例づゝあげるにとどめるが、この二例を見ても文字の上からは両方の例があるので、今はこの場合としていづれが適切であるかを考へて決すべきだといふ事になる。まづ用字としての適否を考へるに、「牟」の文字としてマカレナムと訓むとすればナ^ムの表記が無い事になる。ナムとあるべきところへ「牟」一字を書いたと見るべき確実な例は他に求める事が出来ない。しかし「入而所見牟」（十二・三一八）、「忍不得牟」（十二・二九八七）の如き「(ケ)牟」「(テ)牟」の例があるからやむを得ずば、「(ナ)牟」も認められないではない、といふ事になる。そこで他方「乎」の文字としてマカレムヲと訓めば、これはム^ムの表記が無いといふ事になる。しかし助動詞「む」の表記を略する例は夥しくある。右にあげた例の中にも「相時」（二・一四〇）、「今日谷相乎」（十二・三一二二）があつた。すぐ先にある同じ作者の「後毛相跡...不相可聞」（七四〇）の如き一首中に「む」の訓添が二つまである。この二つの相違を較べると用字として「乎」を採りムヲと訓む方が自然だと考へられる。次に用語としての適否を見ると、「なむ」と「む」とだけを較べると一応どちらでもよいやうに思はれる。巻かうとする相手の意志に任せる心が主となれば「なむ」（三・三七九）でもよく、みづから巻かれようと願ふ心が主となれば「む」の方がよい事になる。しかしここは、たとへば「いつか越えなむ」（一・八三）の如くしひて完了の「ぬ」を加へて、前者の意味にとるよりも「む」とする方が自然であり、古訓にテニモマカレムとしたのもさうした気持が感じられたからだと考へる。（元に右に「牟」とあるのも「乎」をムと訓む事に不審を感じての書添で、さうしたところから「乎」が「牟」に改められる事にもなつたのだらうかと私は考へる。）しかしその為にテニモとモを訓添へる事は無理と思はれ、仙覚はテニマカレナムとしたのであるが、それは原文を「牟」と考へたからさう訓まざるを得なかつたのであらう。それが「乎」とある古本が確実にあり、テニマカレムヲと訓み得るとなれば、「なむ」と「むを」との是非を比較する事になる。さうなると右にあげた「今日だに逢はむを」（十二・三一二二）の例もある事ながら、それよりも大嬢の「手にも巻かむを」を直接うけたのだから「手に巻かれむを」となるのはいよいよ当然だといふ事になる。相手は「巻かう（巻きたい）ものを」といひ、こちらは「巻かれよう（巻かれない）ものを」と答へたので、契合とはこの事である。「所纏乎」を採りマカレムヲと訓む事用語の上から共に適切である。「まことも」の言葉もそれでいよいよ生かされるであらう。

【考】右家持の三首の作、いづれも大嬢の三首の作に答へたもので、家持の第一首は大嬢の第三首に、家持の第三首は大嬢の第一首に密接に即いた答歌ぶりである事訓釈の条で述べた如くであり、第二首はやゝはなれた感ではあるが第三句に同句を用ゐて気持の上では十分に相応じたものと云へよう。

⑤日本古典文学大系^[5]

【訓読文】 わが思ひ かくてあらずは 玉にもが 真も妹が 手に巻かれむを

【現代語訳】 こんな思いばかりしていないで、ああ、玉になりたい。そうすればほんとに妹の手に巻かれ

るだろうに。

【注釈】 あらずは——ズハ → 八六補注。○玉にもが——玉でありたい。モガは願望を表わす助詞。

上に示した五つの先行研究は、訓読文および現代語訳ともにほとんど同じ内容である。結句の原文には写本による異同があるが（「牟」と「乎」、注釈書④は「牟」が誤りで「乎」を採るべき根拠について詳しい考察を行っている。

次の第2節では、まず先行研究（特に注釈書④）の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新しい訓釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

734番歌の結句の原文は、多くの注釈書が底本としている西本願寺本などには「手二所纏牟」とあるが、元暦校本・類聚古集などの古写本に「手二所纏乎」とあり、通説はすべて後者を正しいものとしてきた。しかし、本当に「牟」を捨て「乎」を採る正当な根拠があるのだろうか。この問題については前節の注釈書④で澤瀉久孝氏が詳しく論じている。そこでは、誤字の可能性や用字の可能性などの観点からは特に「牟」を捨てるべき理由はないとしているが、最終的に「牟」を捨て「乎」を採るべき根拠として次の歌との関連性を重視している。

04/0729 玉ならば 手にも巻かむを うつせみの 世の人なれば 手に巻きがたし

この歌は大伴坂上大嬢が大伴家持に贈った歌である。澤瀉氏によると、家持の734番歌はこの歌に対して答えたもので、特に彼女の歌の結句「手に巻きがたし」に対して家持が「手に巻かれむを」と答えたものだとする。すなわち、彼女が「（もし彼が玉ならば手に）巻こう（巻きたい）ものを」と言い、これに対して彼が「（自ら玉になって彼女の手に）巻かれよう（巻かれない）ものを」と答えたもので、「契合（意気投合する）」とはまさにこういう関係を言うのであると結論づけている。

ところが、澤瀉氏をはじめとする通説には少なくとも三つの問題点がある。まず第一の問題点は、結句の意味の不自然さである。新日本古典文学大系（前節の①）は734番歌の後半部を「いっそ玉にでもなった方がいい、そうしたらほんとうにあなたの手に巻かれようものを」と現代語訳している。ここで注目したいのは最後の「巻かれよう」という表現である。ここの「よう」は「意志」を表す表現である。今の場合、「巻かれよう」の主語は「玉」（家持の身代わりと想定されている）である。「玉」は単なる物体であり自分の「意志」では動くことができず、坂上大嬢が手に取って巻くのを「ただじっと待つ」存在である。だとすれば、「玉」を主語として「巻かれよう」と「意志」の表現するのは、日本語の常識から考えて不自然ではなからうか。

現代語では、「意志」を表す「～よう」という表現は多くの場合「能動」型や「使役」型の動詞に付くが、「受身」の表現で用いられることもある。例えば、「もしあなたがそれで気が済むのなら、あなたの気が済むまで私は殴られよう」である。この場合、「殴られよう」の主語は「私」であり人間であるから、相手が殴りやすいようにそばに寄って行き、私の方から積極的に殴られるのである。だから、「殴られよう」と「意志」の表現をしても不自然さはない。ところが、734番歌の場合には「巻かれよう」の主語は自分の意志では動くこともできない「玉」であるから、ここに「意志」の表現である「よう」が付くのは不自然であろう。

ところが、このような指摘に対して次のように反論する人がいるかも知れない。歌は文学であり、文学

には擬人化がつきもので、今の歌の場合も「玉」は単なる物体ではなく家持の分身であり、「意志」をもち、「玉」の方から積極的に坂上大嬢の方に近寄って行き、「玉」みずから進んで彼女の手巻かれることが想定されているのだ、と。しかし、万葉集には734番歌のほかにも願望を表す「～にもが」という表現が28例あるが、この中にそのような極端な文学的擬人化の例は一つもない。せいぜい次の程度の擬人化があるだけである。

14/3510 み空行く 雲にもがもな 今日行きて 妹に言問ひ 明日帰り来む

この歌では雲が擬人化されているが、雲は風によって流されるものだから、もしこの歌の作者が「雲」だったならば、風向きによって今日妹のいる所まで流されて行って言葉を交わし、明日は逆向きの風に流されて帰ってくるという発想であり、ごく常識的な擬人化である。このほかにも、願望を表す「もがも」、「てしか」、「なむ」、「な」を含む歌など調べてみたが、極端な文学的擬人化の例はなく、万葉集の擬人化はいたって素朴（常識的）なのである。

第二の問題点は、表記の問題である。734番歌の結句の末尾文字は、写本により「牟」と「乎」の二つがある。多くの注釈書が底本とする西本願寺本などには「牟」とあるが、通説は元暦校本・類聚古集・紀州本に「乎」とあるのを信用して「乎」を正しいとしている。ところが、通説が信用している元暦校本・紀州本などには、万葉集140番歌の結句「吾不恋有牟（あが恋ひざらむ）」の「牟」を「乎」に誤写した確かな「前科」があるのである（前節の注釈書④を参照）。したがって、世の中の諺「一度あることは二度ある」に従うならば、734番歌の結句においても、元暦校本・紀州本などが「牟」を「乎」に誤写した可能性がある。

それでは、西本願寺本の誤写の可能性はどうだろうか。西本願寺本が「乎」を「牟」に誤写した確かな「前科」があるだろうか。通説はその「前科」として万葉集3122番歌の結句をあげる。3122番歌の結句は、西本願寺本などには「今日谷相牟」とあるが、元暦校本・類聚古集・紀州本などに「今日谷相乎」とあり、通説はこぞって後者の「乎」を正しいとしている。もし通説のこの判断が正しければ、西本願寺本にも「乎」を「牟」に誤写した「前科」があることになり、表記の信頼性は元暦校本・類聚古集などとほぼ同程度ということになる。ところが、姉妹編の論文において詳しく検討した結果^[6]、3122番歌の結句は西本願寺本の「牟」の方が正しく、元暦校本・類聚古集などの「乎」が誤写である可能性が高い。したがって、もし本論文と姉妹編の論文が正しいとすれば、「牟」と「乎」の誤写に関する問題では、西本願寺本には誤写がなく、一方、元暦校本・紀州本などは「一度あることは二度ある」どころか「一度あることは三度ある」という同じ過ちを繰り返していることになる（類聚古集は二度）。誤写は筆写に携わった個人の不注意によるものであるから、同じ誤写が二度、三度と繰り返されることは同じ人間の「癖」として納得がいく。

最後に、第三の問題点として、万葉集には「～むを」（助動詞「む」＋助詞「を」）という表現が全部で34例あるが（疑義のある734番歌と3122番歌は除く）、これらの中で「むを」の「む」の表記が省略された例はないという事実がある。したがって、もし仮に、表記の問題に関して通説の言い分を認め、734番歌の結句原文を「手二所纏乎」だとしても、「む」に相当する表記がないから、これを「手に巻かれむを」と訓むのは「異例」である。ただし、「む」の後に「を」が続かない場合には、「逢はむとき」を「相時」（140番歌）と表記したり、「後も逢はむと」を「後毛相跡」（740番歌）と表記するなど、「む」の表記が省略されることはよくある。

3. 万葉集734番歌の新しい訓釈

この節では、まず正しいと思われる訓釈の結果を示し、その後に根拠を示すことにする。まず734番歌の原文、訓読、解釈を示す。

【原文】吾念 如此而不有者 玉二毛我 真毛妹之 手二所纏牟

【訓読】わが思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれなむ

【解釈】私の思いがこんなにつらく苦しいのなら、いっそ玉にでもなりたい。そうしたらほんとうにあなたの手に巻かれるだろう。

ここに示した結句の訓みは、第1節の注釈書④にも指摘されているように、鎌倉時代にすでに仙覚が採用しているものである。以下、上に示した訓みと解釈が適切であるかどうか検討しよう。

そのためにまず、次の二つの歌を見比べて欲しい。最初の343番歌は、巻三に収録されている大伴旅人の有名な「酒をほめ称える歌十三首」の中の一詩である。比較のため、今問題になっている734番歌といっしょに並べて示す（カッコ内は原文、以下も同様）。

03/0343 なかなかに 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ（酒二染管）

04/0734 我が思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹が 手に巻かれなむ（手二所纏牟）

この二つの歌を比較すると、歌の構造がほとんど同じであることがわかる。実際、歌の骨子だけを抽出すると、次のように完全な対応関係が見られる。

03/0343 ～ずは…酒壺になりたい…（そうすれば）酒に染みるだろう

04/0734 ～ずは…玉になりたい…（そうすれば）妹の手に巻かれるだろう

いずれの歌も主語は「物」であるから、結句だけに注目すると、343番歌は「酒に染みなむ＝酒に染みた状態になるだろう」、734番歌は「手に巻かれなむ＝手に巻かれた状態になるだろう」となっており、句末の「む」はともに「意志」ではなく「状態の推量」を表わしている。したがって、この対応関係だけを見ても、734番歌の結句は「手に巻かれなむ」と訓むべきであり、通説のように「手に巻かれむを」と訓むべきではないと結論づけられる。なぜならば、343番歌の結句は「染管」であるから、これを「染みむを」と訓むことはできず、「染みなむ」と訓む以外にないから、対応する734番歌の結句もまた「巻かれなむ」と訓むしかない。

このように734番歌と比較すべき歌は343番歌であるのに、澤瀉氏は次に示すように729番歌と比較した上で、734番歌の結句を「手に巻かれむを」とする結論を下した。確かに、734番歌と729番歌はお互いに贈答歌であるから、両者の間に密接な関連があるのは事実であるが、澤瀉氏は、

04/0729 玉ならば 手にも巻かむを（手二母将卷乎） ……

04/0734 …… 玉にもが まことも妹が 手に巻かれむを（手二所纏乎）

の波線部の対応関係に注目した。表面的に見れば、729番歌の「手にも巻かむを」の部分に対応して734番歌も「手に巻かれむを」となるべきように見えるけれども、この二つの歌には、729番歌の主語は「人

間」、734番歌は単なる物体としての「玉」という本質的な違いがあったのである。よって、734番歌が「物」主語構文であることに留意するならば、日本語の常識から、結句は「手に巻かれむを」ではなく「手に巻かれなむ」となるのが正しいと結論づけられる。

最後に、澤瀉氏は「ナムとあるべきところへ「牟」一字を書いたと見るべき確実な例は他に求める事が出来ない」（第1節の注釈書④の波線部）と述べているが、万葉集1993番歌の第二句「見つつ恋ひなむ（見筒恋牟）」の例がある。この訓みは、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集、講談社文庫本万葉集（中西進）によるものである。万葉集注釈（澤瀉久孝）は「見つつか恋ひむ」、日本古典文学大系は「見つつ恋せむ」と訓んでいる。そのほかの例として、万葉集1817番歌の第二句「明日は来なむと（明日者来牟等）」の例があるが、これについては竹生・西の論文を参照されたい^[7]。

4. おわりに

本論文では、万葉集734番歌の特に結句の訓釈に焦点をあてて検討を行い、以下の結論を得た。結句の原文には「手二所纏牟」と「手二所纏乎」の二系統の写本があるが、従来は後者が正しいとされ「手に巻かれむを」と訓読されてきた。しかし、万葉集343番歌の結句「酒に染みなむ（酒二染管）」などとの比較から、「手二所纏牟」の方が正しく、「手に巻かれなむ」と訓読すべきとの結論に至った。以上のような結論が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 414、1999年。
- [2] 「万葉集①」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 358-359、1994年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（一）」、中西進、講談社文庫、p. 340、1978年。
- [4] 「万葉集注釈 巻第四」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 539-542、1959年。
- [5] 「万葉集 一」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 306-307、1957年。
- [6] 竹生政資・西見央、万葉集3122番歌の「今日だに逢はむを」について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 35-41、2011年。
- [7] 竹生政資・西見央、万葉集1817番歌の「明日者来牟等云子鹿丹」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第12集第2号、pp. 111-121、2010年。